

川野芽生『無垢なる花たちのためのユートピア』を彩る言葉たち

視覚とは
幻肢痛の
ごときもの。

魂というの
は木喰い虫
みたいな
ものなんだ
って

真つ逆様に墜ちてゆくとき、
天使はもつともうつくしく
見えるのかもしれない。

「私に従うな。
おまえの思っている通りの
ことを言え。
おまえの、思っていることを」

彼らには話すことが星の数ほどあり、
星と星のように隔たっていたが、
星と星のように遠く呼び交わす
ことができた。

私の、大嫌いな親友。
君はどうして死ななくては
ならなかった？
私はどうして君の死を
悲しまなくてはならない？
ほんとうにあなたはもう
何も答えてくれないの？
楽園に一番近いはずのこの船で、
あなたが見ていたのは地獄だったの？
わたしたちは三度目の春を迎えると
花季になって恋をするのだった

この手紙は夢の中で書いています。

真実という言葉を、

夏椿は口の中で

私は何を。呑み込むように発言した。

私は何を。忘れたかったのだろうか？

月が真円となったとき、
われらは色のある血を流し、
色のある死を死ぬだろう。

最初の日が地上に射す前、
まだ世界が闇に閉ざされ、
人びとは月が上ることを指して
昼と呼んでいた頃の話。
ごくありふれた惨事。
日常的な殺戮。

に、返りつ、
れ、彼女のこと
を——
に、溢れた。
この街の人たちはすこし

通影は透けはじめている。

生きていた、私たちは。
あなたたちなんて
いなくても、
私たちだけで。

大人は「……何か怪しい、と思ってるわけだ」
いのか。「そう。この壁の外の世界は、

な多しもう滅んでたりして」
一つ数に人間、と彼は彼自身の言葉で言った。

音しか動揺ようにはしか聞こえなかった。
物しか動揺ようにはしか聞こえなかった。

#発言まとめメーカー

『Lilith』で注目を集める幻想文学の新たな才能が贈る、初の小説集

東京創元社